

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	GrabityLiNE		
○保護者評価実施期間	令和7年 1月 1日		～ 令和7年 12月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	2人	(回答者数) 2人
○従業者評価実施期間	令和7年 1月 1日		～ 令和7年 12月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5人	(回答者数) 5人
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 2月 10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもが安心して通所できており、事業所に行くことを前向きに捉えている様子がうかがえる。	子どもの気持ちや不安に丁寧に寄り添い、安心して過ごせる環境づくりを大切にしている。 日々の関わりの中で、子どもが「できた」「楽しい」と感じられる経験を積み重ねられるよう意識した支援を行っている。	今後も、子ども一人ひとりの様子や気持ちの変化を丁寧に把握し、安心感を基盤とした支援を継続していく。 通所への前向きな気持ちを大切にしながら、発達段階に応じた経験や活動内容の充実を図っていく。
2	子ども一人ひとりの気持ちやペースに配慮した支援により、通所への意欲が維持されている。	子どもの発達段階やその日の体調・気分に応じて、無理のない関わりや活動の進め方を心がけている。 一律の対応ではなく、個々のペースを尊重することで、通所や活動への意欲につながる支援を意識している。	今後は、子どもの変化や成長を職員間でより丁寧に共有し、支援内容の見直しや工夫につなげていく。 引き続き、子どもが自分のペースで安心して成長できる支援体制の充実を目指していく。
3	事業所内での関わりを通して、子どもが落ち着いて過ごせる環境づくりができています。	環境設定や職員の関わり方に配慮し、子どもが安心して過ごせる雰囲気づくりを意識している。 落ち着いて活動できる空間や時間を確保することで、子どもが自分らしく過ごせる環境を整えている。	今後も、子どもの様子に応じた環境調整や支援方法の工夫を継続していく。 安心して過ごせる環境を基盤に、子どもの興味や意欲を引き出す支援へとつなげていく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	事業所外の他機関や他事業所との交流や連携の機会が十分に確保できていない。	児童一人ひとりの発達段階や安心して過ごせる環境を優先し、事業所内での支援体制を重視してきた結果、事業所外との交流や連携にまで取り組みが及んでいなかったと考えている。 また、年齢や特性に配慮する必要性から、外部との関わりを慎重に判断してきたことも要因の一つである。	今後は、児童の状況や安全面に十分配慮したうえで、地域資源や関係機関とのつながりを意識した取り組みを検討していく。 無理のない形で外部との関わりを取り入れることで、児童の経験の幅を広げ、より多様な学びの機会につなげていく。
2	保護者を対象とした家族支援プログラムや研修、情報提供の機会が設けられていない。	これまで、日々の送迎時や個別のやり取りを中心に保護者対応を行ってきたため、研修やプログラムといった形での家族支援を体系的に実施するまでには至っていなかった。 また、保護者の負担や参加のしやすさへの配慮から、実施方法の検討が十分に行えていなかったことも要因として考えている。	今後は、保護者のニーズを踏まえながら、短時間や資料配布など参加しやすい形での情報提供や学びの機会を検討していく。 子どもへの関わり方や発達理解につながる内容を中心に、家庭での関わりにも活かせる支援の充実を図っていく。
3	保護者同士やきょうだい同士が交流できる機会が少なく、家族全体への支援が限定的になっている。	児童一人ひとりへの個別支援を重視してきたことから、保護者同士やきょうだいを含めた交流の場づくりまで十分に取組みできていなかった。 また、交流の機会を設けることに対する事業所側の体制や準備面での課題も要因の一つと捉えている。	今後は、保護者同士が情報交換できる機会や、きょうだいも含めた関わり場の場について、無理のない形での実施を検討していく。 家族全体を支える視点を持ちながら、安心して参加できる支援体制の構築を目指していく。